

3

CHAPTER

第3章

全体構想 ～都市の将来像～

京都は、794年の平安京建都以来、1200年を超える期間、都市としての変化・成長を遂げてきました。その長い歴史を振り返ると、先人達は建都以来幾度もの試練に遭い、自らの暮らしを守るために、知恵と力を結集し、外国の文化や技術も積極的に受け入れながら、伝統に創造を加え、山紫水明の自然の中に、常に個性のある「まち」を築いてきました。

こうした京都の優れた伝統を継承し、市民が安心・安全で豊かな暮らしの実現を目指すことで、時々々の問題に対応しつつ、まちと自然、歴史や伝統と新たな創造、京都の文化と日本・海外の文化、それぞれの調和と共生を育みながら、未来に向かって、世界の京都としての位置を確かなものとする都市づくりが本市の都市計画の理念といえます。

本章では、この都市計画の理念の実現に向けて、都市計画の基本的な考え方や目標とする都市の将来像を共有します。また、目標とする都市の将来像の実現を戦略的に目指す都市づくりの進め方を示します。

1 都市計画に関する基本的な考え方

- (1) 都市の規模に関する考え方
- (2) 将来の都市構造
～京都の都市特性を踏まえた「持続可能な都市構造」～

2 目標とする都市の姿

- (1) 地球環境への負荷が少ない都市【環境】
- (2) 活力ある都市【経済】
- (3) 誰もが快適に暮らすことのできる都市【生活】
- (4) 歴史や文化を継承し創造的に活用する都市【文化】
- (5) 安心で安全な都市【安心・安全】

3 戦略的な都市づくりの進め方

- (1) 多様な主体による持続可能な都市の構築
- (2) 都市計画の柔軟な見直しと活用
- (3) 京都の特性を徹底的に活用した都市づくりの効率的な推進

今後の京都市においては、少子高齢化、若年・子育て層の市外転出による人口動向や厳しい財政状況を見通し、経済と都市の活性化に資する新たな魅力や空間の創造、歴史都市・京都が豊富に抱える知恵や既存ストックを最大限にいかしたクリエイティブなまちづくり、文化を基軸とした政策融合による経済的価値の創出といった「都市経営」や自治の伝統をいかした市民・事業者・行政をはじめとする多様な主体でのまちづくりの推進などが重要です。

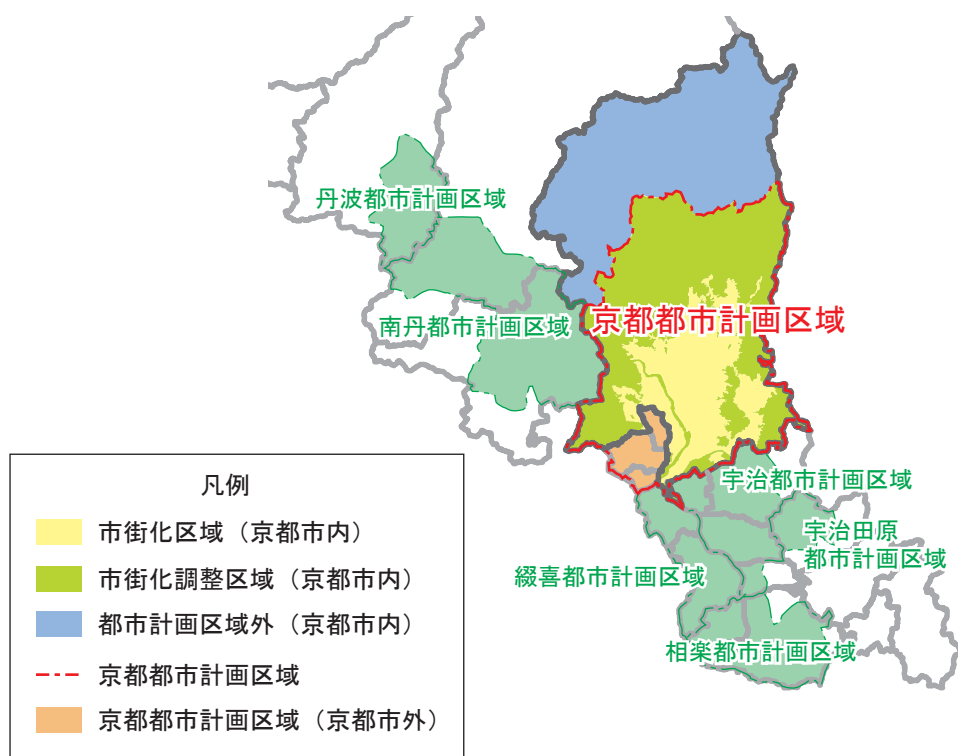
さらに、気候危機ともいわれる状況の中、2050年CO₂排出量正味ゼロの実現に向けた、都市環境や価値観、ライフスタイル、産業構造などの抜本的な転換、長い歴史の中で培われてきた京都の都市特性や潜在力を国際社会においていかすほか、新型コロナウイルス感染症の拡大を踏まえた「新しい生活スタイル」への対応など、ウィズコロナ・ポストコロナ社会を見据えた取組が求められています。

そのため、都市計画の理念の実現に向けて、「都市の持続」「都市の独自性」「都市の経営」といった点を重視し、「保全・再生・創造」の都市づくりを基本としながら、市民の豊かな暮らしや活動を支え、新たな価値を創造する持続可能な都市の構築を戦略的に目指します。

また、その実現のために、京都市基本計画や行政区単位で市民と共に策定した各区基本計画、関連分野の諸計画との連携を図るとともに、国や関連する地方公共団体との広域的な調整も図っていきます。

国や関連する地方公共団体との広域的な調整

京都市の都市計画区域は、向日市、長岡京市、大山崎町の全域と久御山町、八幡市の一部とともに、京都都市計画区域に含まれています。都市計画区域は、一体の都市として総合的に整備、開発及び保全する必要がある区域であり、また、宇治市などが含まれている別の都市計画区域とも隣接しているため、今後は、国や京都府など関連する地方公共団体との広域的な調整が、ますます重要となってきます。



(1) 都市の規模に関する考え方

①人口

京都市の人口は、少子高齢化や若年・子育て層の市外への転出を背景に、長期的に減少することが見込まれています。人口は、経済成長や労働力の確保など、都市の発展と活力の維持に多大な影響を与えるため、人口減少に歯止めをかけることは、京都市の未来を左右する極めて重要な課題です。

②市街化区域

人口減少が本格化し、地球温暖化が加速する中、今後は、都心部と周辺部の拠点の魅力・活力の向上を図るとともに、公共交通を軸とした地域間の連携を強化し、まとまりのある都市構造としていくことが必要です。

京都市においては、歴史・文化資源や時代の要請に応じて整備された都市施設などの様々な有形無形の蓄積がある京都固有の個性的な地域が連たんし、ネットワークする、まとまりのある市街地が既に形成されており、都市基盤についても一定整備が進んでいます。今後は、人口動向を踏まえ、市街地の規模は拡大しないことを基本としつつ、将来的に整備予定のものも含めた都市基盤を最大限に活用し、新規の基盤整備を適切に進めていきます。

③市街化調整区域

市街化調整区域では、特に人口減少と少子高齢化が進行し、農林業の後継者不足や地域の文化・コミュニティの維持が困難になるなどの状況が深刻化する課題が生じています。今後は、豊かな自然を守り、無秩序な開発を防止することを前提に、農林業や観光といった産業の振興などにより、地域の生活・文化などの維持・継承を図っていくことが必要であり、既存集落をはじめとする地域の定住人口の確保や、産業用地を維持し、創出するなど、地域の将来像の実現にふさわしい土地利用の誘導を図ります。

④京北地域をはじめとする都市計画区域外

京都市域面積の約4割を占める、都市計画区域外の京北地域や花脊などの山間部においては、長い歴史に培われた文化やコミュニティなどの地域の個性や自然・歴史的資源を十分に考慮して、森林・農地や景観の保全に努めるとともに、経済基盤となる農林業や歴史・文化、森林などの豊かな自然をいかした観光・サービス業などによる雇用の確保、移住・定住促進や住みやすさの向上を図ります。

(2) 将来の都市構造～京都の都市特性を踏まえた「持続可能な都市構造」～

これまでの保全・再生・創造の土地利用を基本としながら、都市に活力とにぎわいを生み出す都心部や、定住人口の求心力となる周辺部の地域の拠点において、多様な都市機能を集積させるとともに、地域コミュニティを基本とした生活圏の維持・構築を図ることで、京都の都市特性を踏まえた「持続可能な都市構造」を目指します。

①京都市の特性を踏まえた土地利用の展開

○保全・再生・創造の土地利用

内陸盆地都市の特徴をいかし、三山の自然的土地利用とその地理的条件によって限られた市街地の都市的土地利用から構成される都市の基本的な構造を維持・継承します。

そのため、市域を大きく「保全」「再生」「創造」の3ゾーンに大別し、これを都市づくりの基本として、それぞれの特性に応じた土地利用を誘導するとともに、各ゾーンの中においても、保全・再生・創造の考え方に立った個性的な土地利用により持続可能で魅力的なまちを目指します。

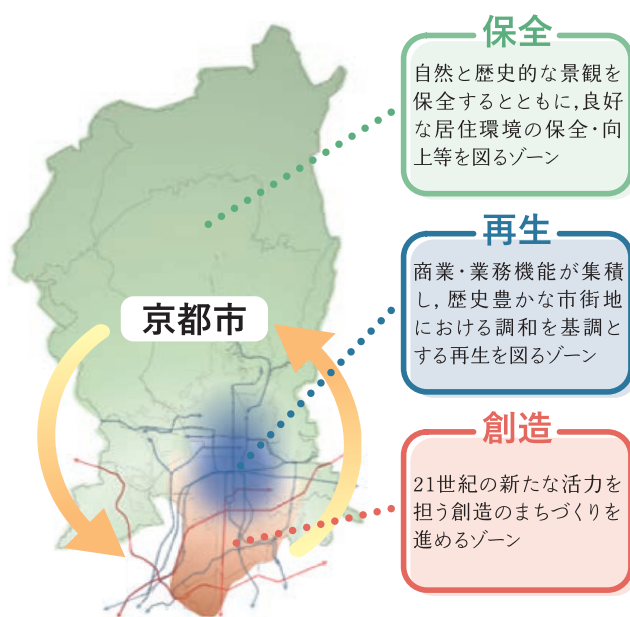
○山間部から市街地内部にかけての段階的な空間形成

保全・再生・創造の都市づくりを踏まえ、保全ゾーンは低層又は中低層を主体とする地域、再生ゾーンは中低層又は中高層を主体とする地域、創造ゾーンは中低層又は中高層を主体としつつ、環境にも配慮しながら高層も許容する地域とします。これにより、三山の景観をいかしながら、山ろく部から市街地内部にかけて段階的な空間構成とします。

○京都ならではの魅力と都市活力の循環

保全ゾーンの豊かな自然や地域に息づく文化、ヒューマンスケールなまちといった特性は、歴史都市・京都が未来に受け継ぐ魅力の源泉です。また、創造ゾーンは、鉄道や高速道路などの交通インフラ整備や産業集積地・住宅団地の整備が進み、近隣都市とのつながりを創出していく次世代のための都市環境と都市機能の受皿をつくるゾーンであり、新たな価値を創造する都市であるための、都市活力の伸びしろと言えます。さらに再生ゾーンは、商業・業務機能が集積し、歴史や文化が積み重なる調和を基調とするゾーンとして、保全ゾーンと創造ゾーンの要素を兼ね備えています。

これらを踏まえ、「保全・再生ゾーン」における京都ならではの魅力と、「創造・再生ゾーン」で生み出す都市活力を循環させることにより、多様な地域拠点の活性化や働く場の確保などを実現し、地理的制約への対応と市域全体の持続性を確保していきます。



※基本とする考え方は上記の3つですが、それぞれのゾーンの中でも、個別に保全・再生・創造の考え方があります。

②都市活力の向上と安心安全・脱炭素社会を実現する都市構造の形成

○交通拠点を中心とした都市拠点の強化

あらゆる世代が豊かに暮らせる生活圏がネットワークする都市とするため、都市に活力とにぎわいを生み出す都心部や定住人口の求心力となる周辺部において、鉄道駅などの公共交通の拠点を中心に、多様な都市機能の集積や建物の更新、機能的な都市環境の確保を図るとともに、幹線道路沿道などの道路交通の拠点に産業機能をはじめとする都市機能の集積を図ります。

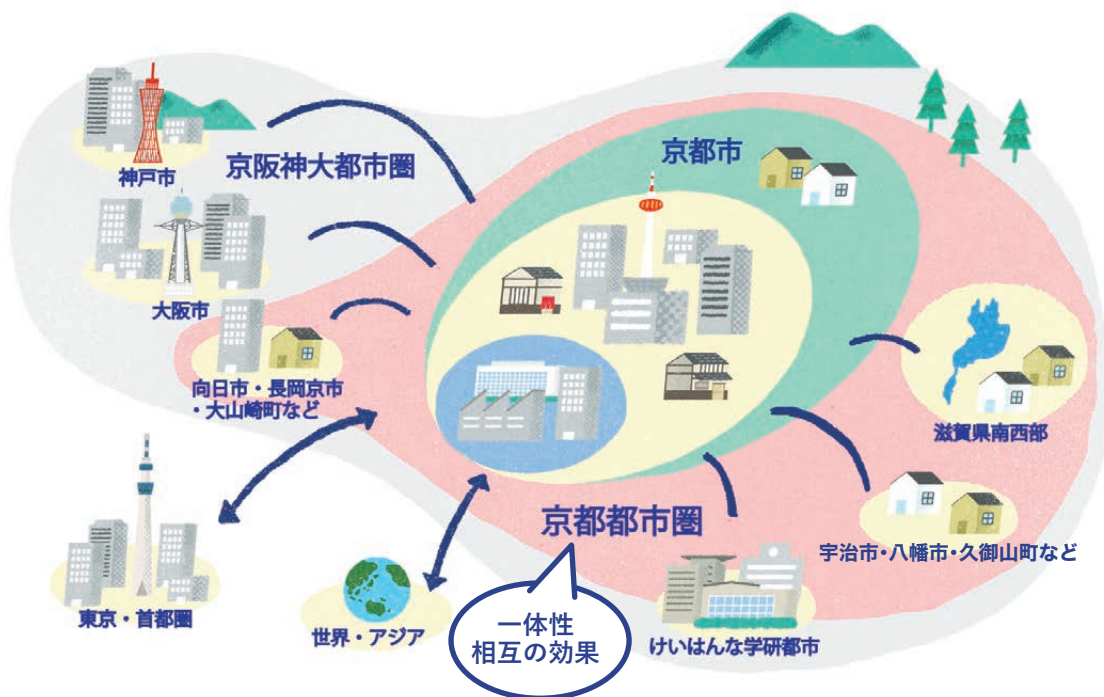
○鉄道等の公共交通をはじめとした都市軸の活用

人と公共交通優先の「歩くまち・京都」の更なる進化を目指すため、鉄道などの公共交通を中心とした交通機能の活用を図ります。さらに、地域の安心・安全や物流を支える都市基盤の充実とともに、地下鉄烏丸線を中心とした南北軸や地下鉄東西線の整備により強化してきた東西軸に都市機能の集積を進めるなど、都市軸の活用を図ります。

○近隣都市との一体性や相互の効果を踏まえた都市圏の強化

近隣都市との一体性や相互の効果を踏まえ、京都都市圏の中核である本市の魅力と活力の維持・向上を図るとともに、けいはんな学研都市（関西文化学術研究都市）や大阪都市圏も視野に京都独自の求心力を発揮し、東京一極集中への対応、京都ならではの魅力の発信を図ります。

■京都市と近隣都市との関係性のイメージ



③相互につながる個性的な地域の形成

○個性的な地域の形成と地域ネットワークの強化

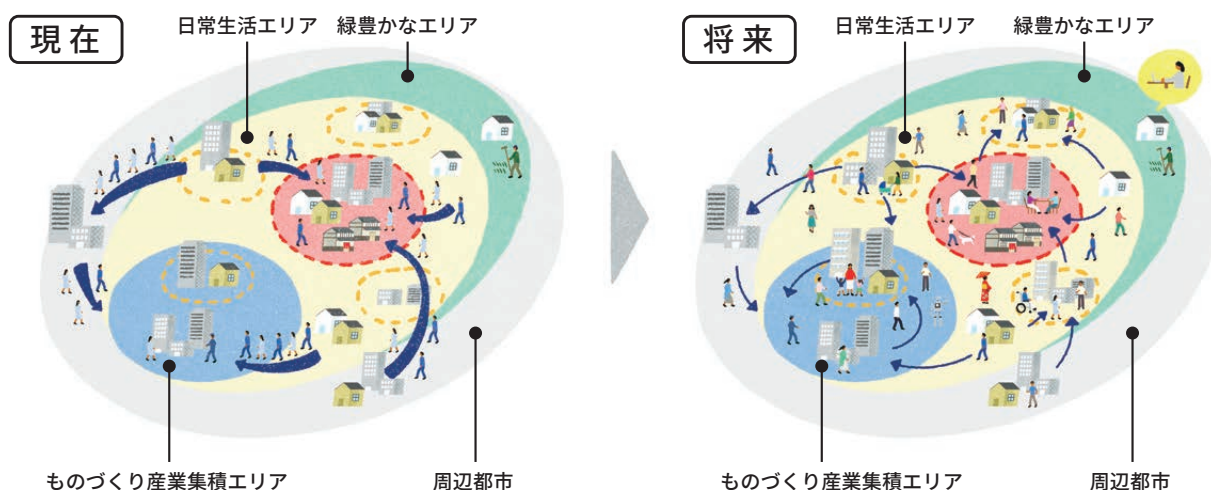
京都市は、元学区や山間部の集落ごとなどの単位で地域コミュニティが形成され、約5,000の町で市街地が構成されています。そのため、均質な同心円状の都市ではなく、個性的な地域がネットワークされたヒューマンスケールな都市を形成しています。

これらの個性的な地域の魅力・活力を向上させ、ネットワークを維持・強化することで、複数の地域がつながった生活圏の形成を図り、子どもから高齢者まで安心し、快適に生活ができるよう、日常生活を支える商業・サービス、福祉などの機能を備えた生活圏の維持・構築を図ります。

○新たな時代の「職住共存・職住近接」の形成

真のワーク・ライフ・バランスの実現やこれからの暮らし方にも対応した都市を目指すため、都心部への都市機能の集積だけでなく、地域中核拠点エリアをはじめとした周辺部の多様な地域の拠点にも、その特性に応じ、働く場や住む場所を充実させるなど、徒歩圏内で生活と活動の両方を賄えるとともに、様々な人々が活躍するまちづくりを推進します。

■住まい方・働き方の将来イメージ



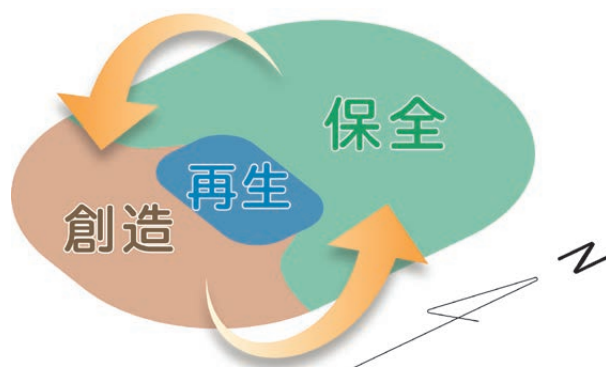
○これからの「暮らしと営み」に対応したまちづくりの推進

【学術文化・交流・創造ゾーン、ウォークアブルシティ等】

SDGs, ICT への対応やウィズコロナ・ポストコロナ社会も展望し、関連施策の連動性を深めた総合性の高い方策を推進することで、生活者の目線で未来への希望を実感でき、次世代も愛着を持てる地域の形成や都市の持続性の基礎となるヒューマンスケールな地域の魅力向上を図ります。

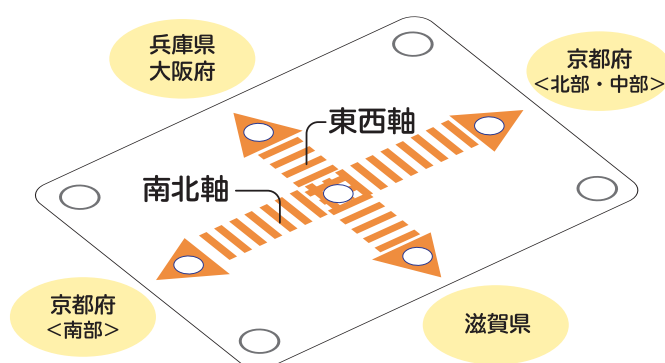
①京都市の特性を踏まえた土地利用の展開

- 保全・再生・創造の土地利用
- 山間部から市街地内部にかけての段階的な空間形成
- 京都ならではの魅力と都市活力の循環



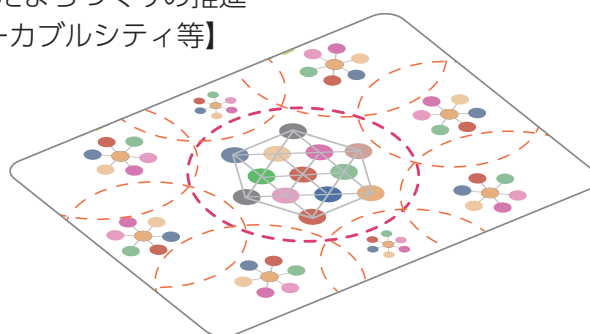
②都市活力の向上と安心安全・脱炭素社会を実現する都市構造の形成

- 交通拠点を中心とした都市拠点の強化
- 鉄道等の公共交通をはじめとした都市軸の活用
- 近隣都市との一体性や相互の効果を踏まえた都市圏の強化



③相互につながる個性的な地域の形成

- 個性的な地域の形成とネットワークの強化
- 新たな時代の「職住共存・職住近接」の形成
- これからの「暮らしと営み」に対応したまちづくりの推進
【学術文化・交流・創造ゾーン、ウォークブルシティ等】



2

目標とする都市の姿

様々な都市活動を持続的に展開することのできる都市を実現するため、京都市基本計画で示されている6つの京都の未来像を基本に、互いに深く関連する「環境」「経済」「生活」「文化」「安心・安全」の5つの面から、目標とする都市の姿の実現を目指します。



(1) 地球環境への負荷が少ない都市【環境】

京都市は、環境への負荷が少ないまとまりのある都市構造を有するとともに、いち早く三山の保全や「歩くまち・京都」の推進、環境保全や生物多様性の保全に取り組むなど、環境との共生を大切にしてきた都市です。

2050年までのCO₂排出量「正味ゼロ」などの達成や自然共生社会の実現に向けて、都市環境や価値観、ライフスタイル、産業構造などの抜本的な転換を進めるとともに、生物多様性の保全を図り、地球環境への負荷が少ない都市を目指します。

①モビリティの転換等による脱炭素型の都市

「歩くまち・京都」の推進により、バス・鉄道利用者数の増加、自動車分担率の減少など、クルマ中心から「歩く」ことを中心としたまちと暮らしへの転換が進んできました。

「歩くまち・京都」の更なる進化により、安心・安全で魅力的な歩行空間の創出など、歩く暮らしを大切にするスマートなライフスタイルの実践を促すとともに、IoTやAI、自動運転などの新技術、マイカー以外の複数の交通手段を利用者に最適なパッケージで、サービスとして提供する「MaaS」を推進し、快適で効率的な移動の創出、人の移動の最適化を図り、環境にやさしい公共交通網の発展、ひいてはモビリティの転換による脱炭素型の都市を目指します。

■地下鉄



■バス



「歩くまち・京都」の更なる進化について

「公共交通ネットワーク」の取組、「まちづくり」の取組、「ライフスタイル」の取組を3つの柱として、誰もが公共交通をより便利で快適に利用するとともに徒歩も自転車も“かしこく”組み合わせて出かけるスマートなライフスタイルが定着し、「出かけたくなる」魅力と活力のあふれるまちを目指します。

主な施策

- 市内で運行するバス、鉄道の交通事業者等の連携による、快適、便利に利用できる公共交通の利便性向上策の推進
- 都心部幹線道路や観光地周辺道路などにおける安心・安全で魅力的な歩行空間の創出
- LRT、BRTや自動運転技術を活用した新たな交通システムに関する幅広い検討
- 地域の特性に応じた道路の使い方を検討し、通過交通の抑制、物流対策、駐車場施策、パークアンドライドなどの自動車利用の適正化・効率化の推進
- 市民のライフスタイルを「過度に自動車に頼る暮らし」から「徒歩や自転車、公共交通をかしこく組み合わせて出かけるスマートなライフスタイル」に転換するため、モビリティ・マネジメントの実施
- IoTやAI、自動運転などの新技術、MaaSの推進

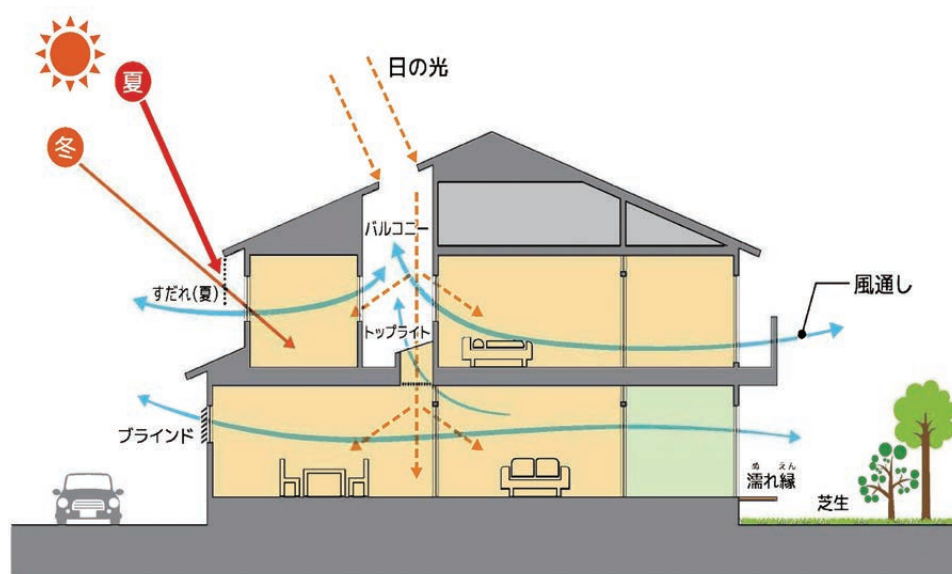
等

②エネルギーの転換による脱炭素型の都市

脱炭素社会の実現に向け、最大限の省エネに加え、使用されるエネルギーの全てを、二酸化炭素を排出しないものへ転換していく必要があります。そこで、市内の再生可能エネルギーを最大限に創出するとともに、再生可能エネルギー電気の選択促進、電力会社による再生可能エネルギー供給に向けた働きかけなど、「需要面」と「供給面」の取組を並行して進めることで好循環を生み出し、再生可能エネルギーの利用を着実に拡大していきます。

また、都市施設のライフサイクルコストの低減、建築物の長寿命化や環境性能の高いCO₂を排出しない建築物の普及、省エネ機能の向上、リサイクルの徹底や再生材、木質バイオマスの活用、エネルギーマネジメントシステムの導入検討、太陽光発電などの再生可能エネルギーの導入といった取組などを積極的に展開することで、エネルギーを有効活用した脱炭素型の都市を目指します。

■京都の長い歴史の中で培われてきた生活の知恵をいかす「京都らしい省エネ住宅」



主な施策

- 都市施設整備におけるリサイクルの徹底や再生材の活用、再生可能エネルギーの利用等、自然の循環に負荷を与えない都市づくり
- 大規模な土地利用転換等を契機としたエネルギーマネジメントシステムの導入検討
- CASBEE 京都の推進や長期優良住宅の普及
- 「京都らしい省エネ住宅」の普及
- 環境への負荷が少ない次世代自動車の普及

等

③自然と共生した脱炭素型の都市

京都市は、山紫水明と称される三山の森林や市内を流れる河川の水辺をはじめ、神社仏閣などのまとまった緑が市内各地に点在しています。

三山や北部山間地をはじめとするまとまりのある森林の保全に加え、農林業などを介した緑の保全、生物多様性にも配慮した森林・緑地の保全や積極的な活用、市内産木材「みやこ杉木」の有効活用などによる地産地消の推進、緑と潤いのあふれる魅力的なオープンスペースの充実、市街地内の緑や河川の水辺の保全などに取り組むとともに、舗装面の改良などによるヒートアイランド対策にも取り組むことで、京都で培われてきた自然と共生する文化など、京都ならではの多様性・豊かさを礎とする、脱炭素型の都市を目指します。

■京都市北部を望む



■みやこ杉木使用事例（嵐電北野白梅町駅）



主な施策

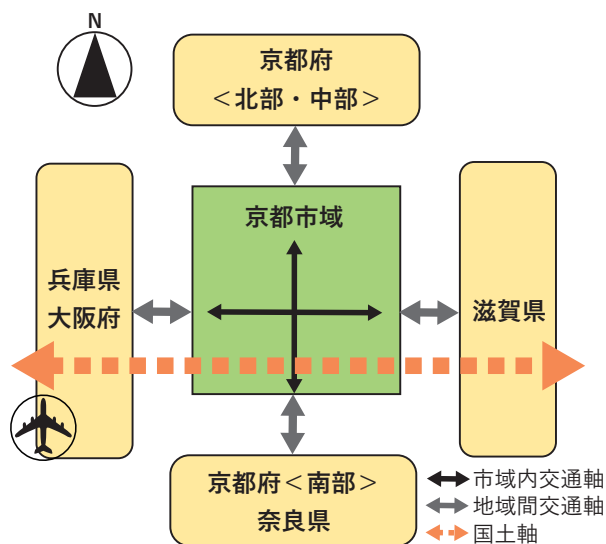
- 市域の過半を占める森林の維持保全と、地域活性化に向けた積極的な活用
- 幹線道路における街路樹の充実や、市街地内のまとまりある緑の維持保全
- みやこ杉木（北山丸太を含む）の利用促進
- グリーンインフラをいかしたオープンスペースの充実、市街地の緑や河川の水辺の保全 等

(2) 活力ある都市【経済】

京都市の特徴は、農林業や伝統産業から先端技術産業まで、多様な産業が展開するものづくり都市であるとともに、日本のみならず世界から多くの人々が訪れる国際文化観光都市であることが挙げられます。また、近隣都市から多くの通勤者・通学者のほか、買い物客が訪れる商業機能や業務機能が集積している都市としての性格も有しており、京都都市圏の中核都市としての役割を担っています。

今後、京都都市圏の更なる活力を創出していくために、産業・商業・業務機能や大学をはじめとする知的機能の集積、歴史・文化資源の集積といった様々な資源をいかし、その質を更に高めるとともに、創造ゾーンにおける伸びしろをいかして、都市基盤や近隣都市とのつながりを踏まえ、定住人口や交流人口などを拡大し、それらを支える都市環境や都市機能の創出を図りつつ、活力ある都市を目指します。

また、市街地の中にも歩きたくなる魅力的な空間が充実するとともに、身近な地域にも働く場や暮らしを支える機能、ゆとりと付加価値のある空間が広がり、市全域にわたってにぎわいのあるクリエイティブな都市を目指します。



①にぎわいのある都市

京都市には、商業機能や業務機能が集積しており、近隣都市から多くの通勤者・通学者や買い物客、観光客が訪れ、市内各地ににぎわいをもたらしています。

京都市域のみならず、国内外から訪れる多くの人々の活動を支える京都らしい都市空間を演出する都心部をはじめとし、歴史・文化資源をいかした独自の都市空間の充実・創出を進める取組、利便性の高い公共交通の拠点での子育て期をはじめ、それぞれのライフステージに応じた必要な都市機能の強化や新たな交流機能の創出などの取組を展開することで、にぎわいのある都市を目指します。

■四条通



主な施策

- 都心部の中核的な都市機能の充実
- 都心部や京都駅周辺における安心・安全で魅力的なにぎわい空間の創出
- 歴史的な雰囲気を持つ独自の都市空間の創出（京町家の保全・継承等）
- 高度化・多様化するニーズに対応した都市機能の強化
- 広域交通ネットワークの利便性向上

等

②ものづくり・大学の都市

京都市は、伝統産業から先端技術産業まで、また、中小企業から世界的な大企業までが立地し、多様な産業・業務機能などが集積する全国有数のものづくり都市です。また、多くの大学が立地し人口の約1割が大学生に相当するなど、京都は世界に誇る「大学のまち」「学生のまち」であり、「京都のまち」「大学・学生」の両者にとって、互いは必要不可欠な存在です。これら大学、企業の研究所などの集積と産学公の連携が新たな産業創出につながるなど、京都のものづくりを支えています。

定住人口や就業者数、交流人口の拡大とともに、都市の活力を生み出すため、生産機能の更なる集積や物流を支える幹線道路網の維持強化などの取組、京都企業の優れた技術や大学などの知的資源・企業の連携をいかした付加価値の高いものづくりの推進、新たな価値の創造による知恵産業の推進、産学公の連携による新産業の育成振興と新事業の創出、また、産業としての農林業と他産業との連携や住環境との調和、デジタル技術の導入により、快適で生産性の高い都市活動の実現を図るなど、ものづくりを支える都市を目指します。

■桂イノベーションパーク



主な施策

- 製造業等の操業環境、農林業の営農環境の維持保全
- 内陸工業地域として、物流等を支える広域交通網体系の維持・向上
- 市域南部における生産・本社・研究開発・流通機能等の計画的な誘導
- 産業振興のための事業環境整備（企業立地支援等）
- 高付加価値のものづくりを支える土地利用、交通ネットワークの利便性向上 等

③質の高い観光都市

京都市には、多くの歴史・文化資源があり、日本のみならず世界から5,000万人を超える観光客が訪れています。

京都の魅力を更に高めるための取組など、京都観光振興計画を推進することで、市民生活と観光の調和の下、住んでよし、訪れてよし、働いてよしの、質の高い観光都市を目指します。

■国立京都国際会館



主な施策

- 宿泊施設整備における事前説明手続やバリアフリーの更なる充実
- 歴史的な町並みや美しい景観の維持継承
- 滞在型・宿泊型観光や上質な観光サービスを求め、これに對価を支払う観光客の消費拡大につながる環境整備 等

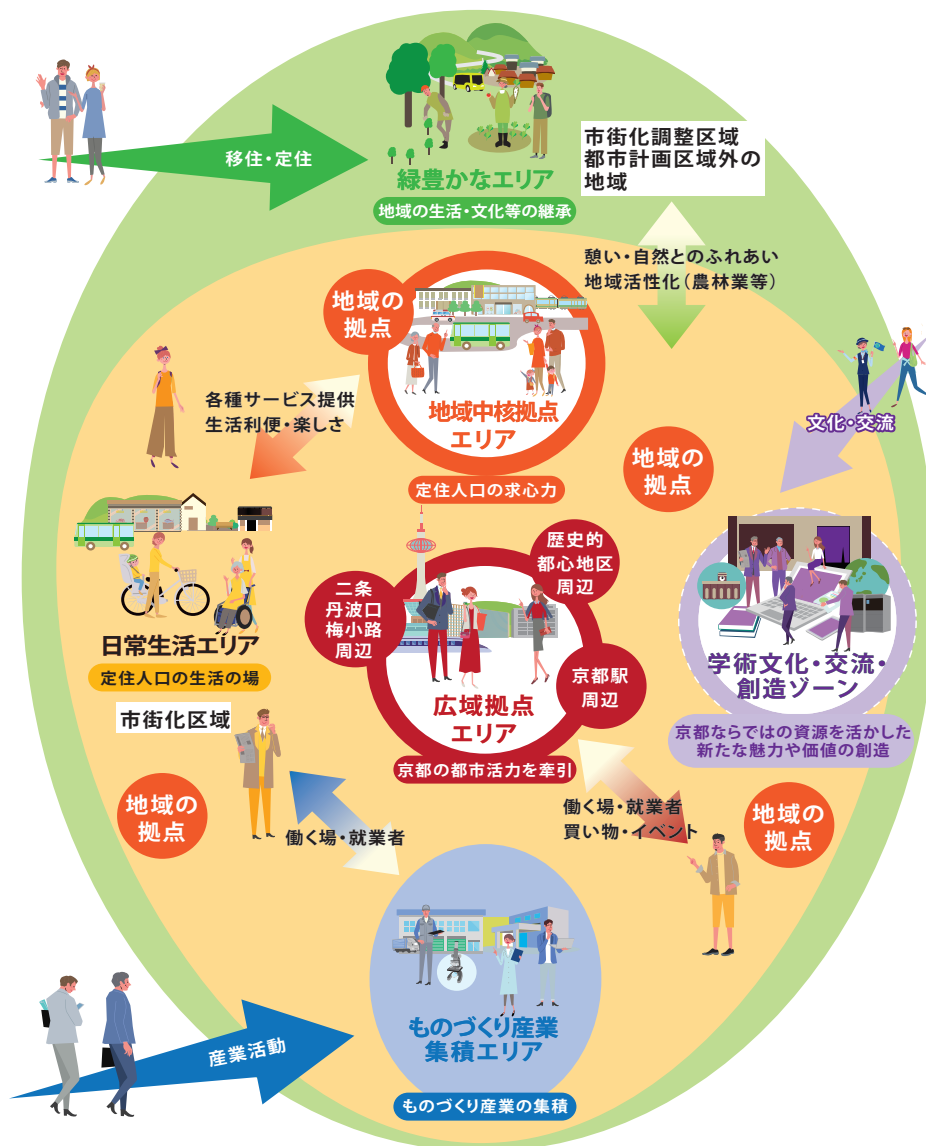
(3) 誰もが快適に暮らすことのできる都市【生活】

京都市は、ヒューマンスケールで個性的な地域が連たんし、ネットワークすることで、暮らしやすい生活圏が既に形成されています。この生活圏には、徒歩を中心とした日常の生活圏から鉄道やバスを利用する広域の生活圏まで、様々なものがあります。

都市の発展と活力を維持するためには、満足度が高く、誰もが働きやすく、子育てのしやすい「真のワーク・ライフ・バランス」を実現した健康で安心・快適な暮らしや、ヒューマンスケールな地域の魅力が身の回りにあふれ、身近な生活圏で「職住」のみならず「学遊」などの多様な機能が融合した、暮らしてみたいくなる生活空間が必要です。

しかし、今後の人口減少・少子高齢化に伴う、地域コミュニティの弱体化や日常生活における公共交通機関の利用が困難な高齢者の増加、小売業の衰退など日常生活を支える機能の維持が困難になるなど、居住環境に関し様々な課題が拡大する懸念があります。

そのため、地域特性や既存の交通ネットワークをいかしつつ、日常の生活を支えるとともに、快適性と利便性の高い地域の形成を図ることで、ウィズコロナ・ポストコロナ社会も展望し、これからのライフスタイルにも対応した暮らしやすい生活圏を維持・構築し、誰もが快適に暮らすことのできる都市を目指します。



①地域の個性をいかした快適性と利便性の高い都市

地域の活力や居住環境の維持・向上のため、地域の特性や資源をいかしつつ、日常生活を支える医療、福祉、商業、教育、子育て、文化、コミュニティなどの機能の充実と適切な配置、公共交通を中心とした交通拠点への都市機能の集積、空き家・空き地の適切な管理の促進や有効活用などの取組を展開するとともに、地域の特性に応じたまちづくりなどの取組を展開することで、地域の魅力向上を図り、快適性と利便性を兼ね備えた都市を目指します。

主な施策

- 既存施設の有効活用と機能の充実（居住水準や子育て環境、生活サービス機能等の充実）
- 公共交通を中心とした多様な移動手段の確保
- 市民生活に不可欠な鉄道ネットワークをいかす土地利用の展開
- 局地的な空洞化（人口減少）を食い止める土地利用の推進
- 歴史資源や自然資源をいかしたまちづくりの展開
- 地域と連携した京都ならではの空き家対策の推進

等

②暮らしやすい生活圏がネットワークする都市

豊かな暮らしを維持・発展させ、子どもから高齢者までが安心・安全で快適な生活ができるよう、地域の特徴をいかして、近隣都市とともに生活圏を形成する地域も含めた市内各地での地域間のネットワークの維持強化や交通利便性の向上、交流の活性化を図ることで、暮らしやすい生活圏がネットワークする都市を目指します。

主な施策

- 既存の地域資源や鉄道駅等の交通拠点を中心とした生活圏の維持
- 生活圏の特性に応じた土地利用の推進や交通利便性の向上

等

③多様な地域コミュニティの活動が盛んな都市

京都のまちは、古くから元学区ごとの地域コミュニティが確立し、職住共存のように暮らしに根付いた文化が形成されています。また、外国籍市民や帰国者、留学生などの市民が多く暮らしている多文化共生の都市でもあります。

一方、少子高齢化や単身世帯の増加、ライフスタイルの変化などにより、これらの地域コミュニティの維持が困難になってきている地域もあります。

地域コミュニティと連携したまちづくりの取組や地域固有の居住環境の整備などを通じて、文化の相違に起因した課題や市民生活における様々な課題を地域で解決するなど、多様な地域コミュニティの活動が盛んな都市を目指します。

また、ウィズコロナ・ポストコロナ社会に対応して、地域で暮らし、働き、学び、訪れる多様な人々が担い手となり、誰もがつながり支え合うことのできるコミュニティが形成される都市を目指します。

■地域での交流行事（修徳公園での夏祭り）



主な施策

- 地域固有の居住環境の維持・活性化

等

(4) 歴史や文化を継承し創造的に活用する都市【文化】

京都市は、歴史に培われた豊かな文化と奥深い伝統に彩られた国際文化観光都市です。

都市格を高め、京都が京都であり続けるために、歴史的景観を形成する建築物や庭園、優れた景観、祭りをはじめとする伝統行事や伝統芸能、すまいや生活の文化、高い感性と匠の技を備えた伝統産業など、有形無形の京都の特性を守り、育むことはもちろん、これらを創造的に活用し、次世代に継承していくとともに、その魅力を一体的に発信するなど、世界に向けて独自の求心力を発揮する都市を目指します。

①歴史的な町並み景観を守り、育む都市

京都には、神社仏閣や京町家などの歴史・文化資源が多数残されており、それらが京都らしい景観や町並みを形成しています。京都の魅力や活力を維持、向上させる取組を加速させるために、平成19(2007)年から実施している新景観政策では、地域特性に応じて建築物の高さ規制やデザイン基準を見直すなど、京都市全体を対象に景観のルールを創設しました。

今後とも、地域特性に応じた景観づくりや優れた町並みの保全などの取組を展開することで、更に魅力的な景観、町並みの形成を図るなど、歴史的な町並み景観を守り、育む都市を目指します。

■祇園新橋地区



主な施策

- 三山の眺望などに配慮した景観形成
- 歴史的町並みの保全
- 道路の無電柱化による景観形成

等

②京町家や庭園等の歴史・文化資源を活用する都市

京都市内には、数多くの文化財・京町家などの歴史的景観を形成する建築物や庭園など、歴史・文化資源として貴重なものが数多く残されています。なかでも、京町家などについては近年再評価され、住宅としてだけでなく、店舗や宿泊施設、オフィスなどとして活用する事例も増えています。

このような歴史・文化資源について安全性を確保したうえで保全・継承を行うとともに、新たな歴史や文化を創造し活用することで、新旧の魅力が融合する都市を目指します。

■京町家



主な施策

- 京町家等の既存建築物の有効活用
- 文化財や京町家等の歴史・文化資源の安全性の確保
- 京都文化遺産を活用した取組
- 歴史的景観を形成する建築物や庭園等の保全・継承・活用
- 「新町家」の普及

等

③京都ならではの文化を継承・創造する都市

京都市は、伝統芸能、すまいや生活の文化などが古くから受け継がれ、まち全体が文化・芸術の都市となっています。また、西陣織などの伝統産業、京野菜や北山杉などの農林業など、地域に根差した産業が息づいており、歴史に培われた生業と生活が結びついた京都らしい職住共存の魅力が受け継がれています。

このような京都の特性を保全・継承するとともに、京都の歴史や文化、大学、伝統・先端産業など、地域の特性をいかし、そこで生まれる活力やにぎわいを京都の活性化につなげます。さらに、文化芸術とまちづくりの連携を図ることで、新たな魅力や価値を継承・創造する個性豊かな都市を目指します。

主な施策

- 岡崎地域の魅力向上の取組
- 京都駅周辺エリアにおける文化芸術によるまちづくりや新産業創出につながる取組
- 北山文化・交流拠点地区における文化と憩いに包まれた交流エリアの形成
- 西陣織など、伝統産業の継承に寄与する土地利用の推進
- 住・工・農のバランスに配慮した土地利用の推進
- 農林業や観光等の産業の振興による、地域の生活・文化等の維持・継承
- 学術文化・交流・創造ゾーンの指定による新たな魅力や価値の創造

等

(5) 安心で安全な都市【安心・安全】

京都市では、地震や水害などの災害に対して大きな被害が予想されており、防災面での都市基盤整備を充実する必要があります。また、大型台風や集中豪雨などの深刻化する気候変動の影響に対応する適応策や、新型コロナウイルス感染症などの未曾有の事態に対応するレジリエンスの重要性も高まっています。

そのため、歴史都市の特性に応じた防災・減災対策やユニバーサルデザインの理念に基づいた取組を図り、災害に強く、ウィズコロナ・ポストコロナ社会においても、高密度でありながらゆとりのある京都ならではの安心で安全な都市を目指します。

①災害に強い歴史都市

京都市は戦災の影響が少ないため、細街路が多く残り、狭小敷地に建つ建築物が多いという特徴があります。面的な都市基盤整備を短期間で行うのは困難なうえ、建替えや増改築の際に道路から敷地の後退が求められる場合があることなどから、個別での建替えなども進まない状況にあります。また、文化財をはじめとする歴史・文化資源なども多く、それらの防災対策も求められています。

これらのことから、地震や水害などの災害による被害を未然に防ぐため、防災対策とまちづくりが連携し、災害に強い都市基盤整備を図ります。また、災害発生時の被害を最小限に抑えるという考え（減災）の下、安全に避難できる市街地の形成や地域コミュニティをいかした取組の充実を図るとともに、機能の分散化・多核化による災害リスクの低減・回避や、農地や山林の保全による生物多様性の確保など、より広域的な視点から防災・減災に備えます。さらに、地域社会の強い絆を守り、迅速な復旧と復興についても検討を行うことで、京都の特性をいかしつつ、安心・安全に暮らすことのできる、災害に備え、災害に強い都市を目指します。

■細街路の様子



主な施策

- 都市基盤の多様な防災対策の検討（道路ネットワークの強化、避難地やオープンスペースの確保、市街地整備、ライフラインの耐震化等）
- 細街路の整備改善に関する総合的な計画の検討
- 建築物の安全性の確保・向上や密集市街地対策等の推進
- 文化財の防災対策
- 被災後も見据えた歴史的市街地の防災対策の検討
- まちづくりを通じた防災対策の充実
- 災害リスクを考慮した一体的な土地利用・建築規制
- 地盤の安全性の確保や治水対策の推進
- 防災・減災に資するグリーンインフラの導入
- インフラ施設周辺等で倒木を未然に防止する仕組みの検討

等

②ユニバーサルデザインの理念に基づいた都市

京都に暮らす人々だけでなく、京都を訪れる人々にとっても、日常や災害時における安心・安全の確保が求められています。

安全性を確保した都市施設の整備、公共空間や都市施設などのハード・ソフト両面にわたるバリアフリー化など、ユニバーサルデザインの理念に基づいた取組を図ることで、誰もが安心して安全な都市を目指します。

■可動式ホーム柵（地下鉄烏丸御池駅）



主な施策

- 安全性を確保した都市施設などの整備
- 不特定多数が利用する空間のバリアフリー化
- ハード・ソフト両面にわたる交通バリアフリーの推進

等

京都の都市特性を踏まえた「持続可能な都市構造」の実現に向け、都市計画に関する動向のモニタリングを行いながら、以下の3つの視点の下、戦略的に都市づくりを進めていきます。

(1) 多様な主体による持続可能な都市の構築

拡大・成長から安定・成熟を前提とした都市づくりへの価値観の転換が求められる中、持続可能な都市づくりを行うためには、地域の魅力や課題・将来像、また、規制誘導に関わる制度の適用や都市施設などの事業実施の必要性・効果などについて、地域に関わる市民・事業者・行政をはじめとする多様な主体で共有することが重要であり、そのうえで、より効率的に都市づくりを行うため、役割分担を行うことが必要です。

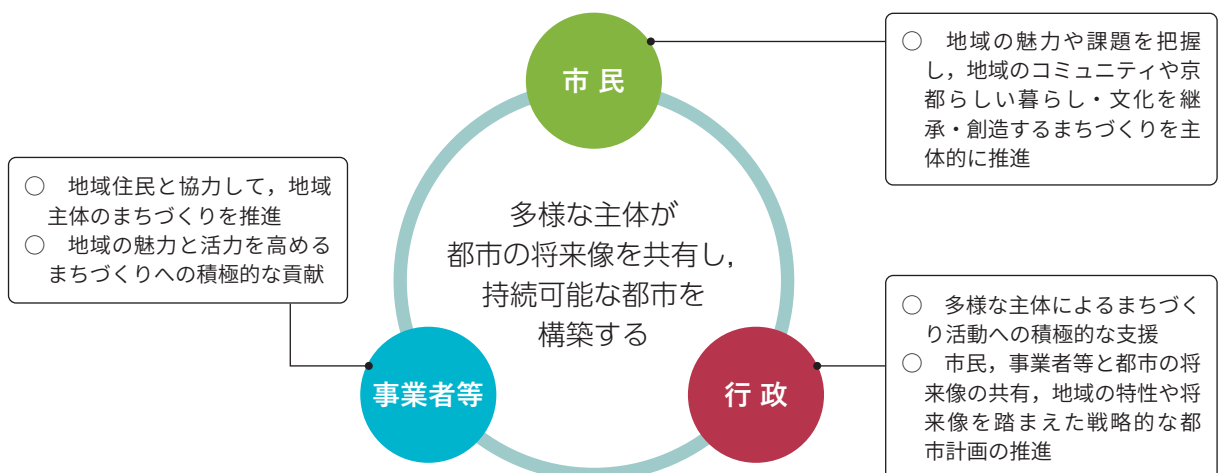
まちづくりの主人公はそこで生活する市民であり、「京都のまちの魅力を更に磨きながら、未来に引き継ぐ」という意識の下、市民自らが地域の魅力や課題を把握し、地域のコミュニティや京都らしい暮らし・文化を継承・創造するまちづくりを進めていく必要があります。また、事業者は、市民と協力して地域主体でのまちづくりを進めていくとともに、地域の魅力と活力を高めるまちづくりへの積極的な貢献が期待されます。

行政は、地域の特性や将来像を踏まえた戦略的な都市計画を推進し、都市の将来像などについて、より一層分かりやすく説明していくとともに、多様な主体によるまちづくり活動を適切に支援し、地域の資源をいかし、新たな価値を創造する持続的な都市活動を支える必要があります。

京都市では、町内や元学区、小学校区などをはじめとする多くの地域で、地域コミュニティを単位としたまちづくりが行われています。こうした京都の特性を最大限に活用したまちづくりを進めていくため、それぞれの地域の魅力や将来像などの共有、より一層の情報公開、また、市民と行政との橋渡しとなる「(公財)京都市景観・まちづくりセンター」の活用などにより、地域の特性に応じた自主的なまちづくりが継続的に展開されるよう、まちづくり活動の支援や仕組みづくりを推進します。

これらの取組を通じて、市民・事業者・行政がそれぞれ「みんなごと」と捉え協働のまちづくりを展開し、地域における良好な環境や地域の価値を維持・向上させ、持続可能な都市の構築を推進します。

■多様な主体による持続可能な都市の構築



(2) 都市計画の柔軟な見直しと活用

未経験の領域である人口減少局面や不安定な経済情勢、技術革新、法改正、市民の都市づくりに対する多様なニーズなど、昨今の都市を巡る情勢の変化は著しく、都市づくりの実現性を高めるため、都市計画は変化に迅速な対応ができる柔軟性を確保する必要があります。

そのため、土地利用の動向や都市施設の整備状況、社会経済動向の変化などを都度点検しながら、あらゆる政策分野との融合を模索し、その時点での必要性や実現性、効率性を十分に検討のうえ、適時適切に都市計画手法などの活用を図ります。

また、多様なニーズに対応しつつ、着実にまちづくりを進めるために、全体構想や方面別指針に即した地域の将来像とまちづくりの方針を、地域のまちづくりの状況や必要性に応じ、「地域まちづくり構想」として都市計画マスタープランに順次位置付けるとともに、柔軟にその将来像やまちづくりの方針などを見直すことで、きめ細やかに対応し、まちづくりの実効性を高めます。

(3) 京都の特性を徹底的に活用した都市づくりの効率的な推進

京都市には、三山などの豊かな自然をはじめ、国宝や重要文化財、神社仏閣、歴史的景観を形成する建築物や庭園、優れた景観、土木遺産、長い歴史に培われた文化、地域コミュニティ、伝統産業、知的財産などの歴史・文化資源や時代の要請に応じて整備された都市施設などの様々な有形無形が蓄積し、これら全ての要素と人々の営みが優れた景観を形づくり、今日の京都が創り出されています。そして、これら有形無形の蓄積をいかし、職住共存のまちづくりや新景観政策、「歩くまち・京都」総合交通戦略、「木の文化を大切にするまち・京都」などの歴史都市・京都の特性を高める取組を展開することにより、常に個性あるまちを築いてきています。

今後は、環境負荷の軽減にもつながるリサイクルの徹底や再生材の活用をはじめ、「良いものを長持ちさせる」という考え方（ストックマネジメント）に基づいた都市施設のライフサイクルコストの低減、建築物の長寿命化、民間活力の導入などを進めるとともに、将来的に整備予定のものも含めた都市基盤を最大限に活用するなど、限られた財源の中で京都の特性を徹底的にいかします。

また、都市計画の視点に加え、文化、産業、商業、観光、大学、子育て、福祉など、まちづくりに関わる様々な関係分野の計画や施策と連携しながら、多様な手法や取組の組み合わせによるアプローチを展開し、効率的で個性ある都市づくりを推進します。

